第11課　選ばれた者

【暗唱聖句】

「では、尋ねよう。神は御自分の民を退けられたのであろうか。決してそうではない。わたしもイスラエル人で、アブラハムの子孫であり、ベニヤミン族の者です」ローマ11:1

【今週のテーマ】

【日曜日・キリストと律法】

「兄弟たち、わたしは彼らが救われることを心から願い、彼らのために神に祈っています。10:2 わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証ししますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。10:3 なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。10:4 キリストは律法の目標であります、信じる者すべてに義をもたらすために」ローマ10:1～4

神への信仰に熱心であっても、正しい認識に基づかない場合があります。それは神の義を知らず、自分の義を求めようとするときです。神の義を知らないのですから、神の義に従うこともできません。信仰は熱心であれば良いというものではなく、正しい認識に基づくものでなければならないということです。パウロは律法を守ることがクリスチャンの目標ではなく、キリストこそがわたしたちの目標であると教えています。なぜならば、キリストこそが律法の目標だからです。キリストと共に生きるならば、わたしたちが切に求めている義ももたらされるのです。このことを信じることこそ信仰なのです。

　また、目標と訳されている言葉、テロスは目的とも訳すことができる言葉です。すなわち律法の目的はキリスト、つまりキリストにわたしたちの目を向けさせ、キリストの元へと歩んでいくように導くことこそが律法が与えられた目的だと言うことです。このことの重大さの故に、十戒は今もなお大きな意味を持って輝いているのです。

【月曜日・恵みによる選び】

ユダヤ人は心を頑なにし、福音が異邦人の間にも広がっていく中で、もうユダヤ人は神の民として退けられてしまったのでしょうか。これはユダヤ人にとって切実な問いでした。パウロはそれに対して旧約聖書から同様の事例を提示し、解決を図ろうとします。そして導き出される結論は、ユダヤ人は決して退けられたのではない、その証拠に神様から選ばれた残りの民がいるということでした。

「現に今も、恵みによって選ばれた者が残っています」ローマ11:5

エリアの時代に、ほとんどのイスラエル人たちがバアルを拝む中、神様は「バアルにひざまずかなかった七千人を自分のために残しておいた」と告げておられます。同じように、いつの時代にも神様は特別な民を選び、残されます。それは神様の特別な使命を果たさせるためです。ただ、この残りの民として選ばれたのは、神様の恵みによると書かれてあります。彼らが他の者たちよりも優れていたからとか、努力したからというのではないのです。

「もしそれが恵みによるとすれば、行いにはよりません。もしそうでなければ、恵みはもはや恵みではなくなります」ローマ11:6

同様に、私たちも恵みによって選ばれ、終末時代における残りの民として、いまここにいるのです。

　しかし、すべての民が退けられたわけではないのと同様に、すべての民が残され、選ばれたわけではありません。「恵みによって選ばれた者が残っています」という言い方は、逆に言えば恵みによって選ばれなかった者たちがいるとパウロは考えていることがわかります。残りの忠実な民がいるのと同時に、不忠実な民もいるのです。彼らは快楽にふけり、選民であるとの自意識から自己満足に陥り、気楽で安穏とした生活を送っていました。この誤った感覚が自らに破滅をもたらせるのです。

「では、どうなのか。イスラエルは求めているものを得ないで、選ばれた者がそれを得たのです。他の者はかたくなにされたのです」ローマ11:7

残された者以外は、心が頑なにされたとパウロは言います。まるで神様が心を頑なにされたと言っているようですが、結局のところ自分たち自ら心を頑なにし、それを神様はそのままにさせたということでしょう。しかし、ここにも神様の大きな視点で見たときに意味があるのです。それは異邦人が救いの道が開かれるためだったのだとパウロは言います。

【火曜日・自然に生えた枝】

パウロは多くのユダヤ人が頑なになり退けられたことによって、異邦人に救いがもたらされる結果となりました。「彼らの罪が世の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となった」のです。本来ユダヤ人たちが頑なになったことは悲しむべきことですが、そのことが結果的に異邦人が救われる道を開くことになったとすれば、そこには神様の人知を超えたご計画があるのです。

イスラエルの民が頑なになり神様に背くこと自体は何度も繰り返されてきたことでしたが、異邦人に救いが移っていくことになったのは、長いイスラエルの歴史の中で初めてのことでした。そのきっかけを作ったのがまさにキリストの十字架だったことを思うと、キリストは全人類の救いのために十字架にかかられたことがわかります。

　またパウロはこのようにまるでユダヤ人たちが退けられて、救いが異邦人に移っていったのは、「ユダヤ人たちにねたみを起こさせるためだった」と言います。つまり、神様の愛を求めるようにさせるためでした。ねたみを引き起こしてでも、真に神様のもとに立ち返らせたいと願われたということです。

　ところで、「彼ら（ユダヤ人）が皆救いにあずかるとすれば、どんなにかすばらしいことでしょう」（ローマ11：12）とか、「何とかして自分の同胞にねたみを起こさせ、その幾人かでも救いたいのです」（ローマ11:14）とか、さらには「彼らが受け入れられることは、死者の中からの命でなくて何でしょう」（ローマ11：15）とあるように、異邦人伝道に召されているパウロですが、同胞の救いのために心を割き、そしてそれを確信していることがわかります。ユダヤ人が決して捨てられたわけではないことを証明するために、パウロは二つのたとえを用いています。

「麦の初穂が聖なるものであれば、練り粉全体もそうであり、根が聖なるものであれば、枝もそうです」ローマ11:16

イスラエル人たちは麦粉から食べ物を作る際には、麦粉の初物を神様に捧げました。それによって全体が清まるのでした。同様に、かつてイスラエルの族長たちは神様に捧げられました。そこから国民全体が広がっていき、神様との関係によって清められたものとなりました。選ばれし残りの民も、突然残りの民として誕生したわけではなく、祖先からの信仰を受け継いできたのです。根が聖なるものだからこそ、その枝としての子孫たちもほんのわずかであったとしても、その清さを保つことができるのだとパウロは言っています。さらに異邦人との関係についてパウロは続けます。

「しかし、ある枝が折り取られ、野生のオリーブであるあなたが、その代わりに接ぎ木され、根から豊かな養分を受けるようになったからといって、折り取られた枝に対して誇ってはなりません。誇ったところで、あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです。」ローマ11:17、18

イスラエル人はオリーブの木で、異邦人は接ぎ木された野性のオリーブの枝としてたとえています。根があるからこそ、接ぎ木された枝は生きることができるのだから、誇ることはできないと言います。このたとえは根はまだ生きている、つまりイスラエルは完全に捨てられてはいないことを表しており、それを土台として異邦人たちの救いが可能となっていることを表しているのだとパウロは言います。そして、さらいパウロは続けます。

「そのとおりです。ユダヤ人は、不信仰のために折り取られましたが、あなたは信仰によって立っています。思い上がってはなりません。むしろ恐れなさい。神は、自然に生えた枝を容赦されなかったとすれば、恐らくあなたをも容赦されないでしょう」ローマ11:20、21

【水曜日・全イスラエルが救われる】

「兄弟たち、自分を賢い者とうぬぼれないように、次のような秘められた計画をぜひ知ってもらいたい。すなわち、一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人全体が救いに達するまでであり、こうして全イスラエルが救われるということです」ローマ11:25、26

神様には秘められた計画がありました。それは一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人にも福音が届けられるだめだったとわけですが、異邦人全体が救いに達したならば、つまり全世界に福音がのべ伝えられたならば、再びイスラエルに救いが戻ってくるということです。このパウロの言葉は、「神様がご自分の民を退けられたのか」という問いに対する明確な答えです。また、この答えは預言的です。イエス・キリストは全世界に福音がのべ伝えられたら、地上に再び戻ってくると言われましたが、そのことと、「異邦人全体が救いに達するまでであり」という言葉と、「こうして全イスラエルが救われるということです」という言葉はつながっていきます。ゆえに、再臨直前には多くのユダヤ人の目が開かれて、キリストをメシアとして認めるであろうと言われています。メシアニックジューの存在がそれを物語っているのではないかと言われています。イスラエルの中で特に若者を中心に急速に増えてきているといわれています。

【木曜日・罪人の救い】

「彼ら（ユダヤ人）も、今はあなたがた（異邦人）が受けた憐れみによって不従順になっていますが、それは、彼ら自身も今憐れみを受けるためなのです」ローマ11:31

ユダヤ人が頑なになったのは、異邦人に救いの道が開かれ、神様の憐れみを受けたように、彼ら自身も神様から憐れみを受けるためなのだとパウロは言います。「ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう」（ローマ11:33）と続けます。そして、結論としてこう語ります。

「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです」ローマ11:36

神様を中心にすべての物事を見つめてみると、異邦人とユダヤ人の問題や違いも、このような驚くべき結論に至るのです。